

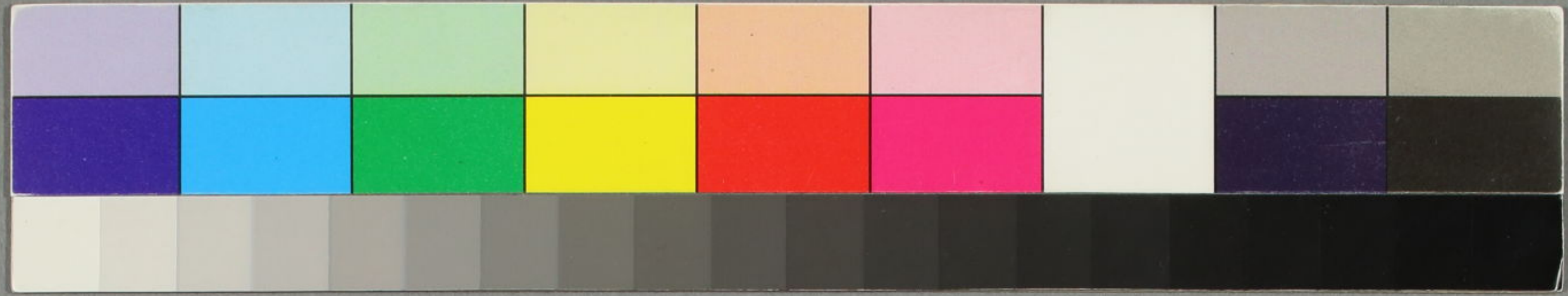
貞享式海印録

月 又秋
日星 正冬
植物 生類

四

へ 5
1117
4





5

貞享武海印録四

曲家劇述



月狂草

遠月花の風雅の的之月は月とあり花は
 巳季よみて記む八月と定まらん中野はるノ又
先ハ出入
 初心の人いづく月七白ノ花は十三白ノ月ある事
 をひきも他人、懐の町直しりるもあつても
 子細ある事、初て月を風雅のた具ある
 あるて竹もぬた程をわてさる月むの白牙
 秋寄を赤むへる凡て居る尾の直上居て毎
 侍のある白ぬきも其時の程も給うけおくとし
お授者月むの社とつる、初心物古のおよある
 和之月花の社とつる、初とある竹におて風雅
 ある一編よあるも又いづく才三白ノ月ある
 わる、五白ノ月あると月社とつる杖の不用の
 附五白よりお季読さるねと他キの不用ある



なる月ありとも苦く凡只表の月一ツ
 程の月花とあるべき又引上て出す月む正花
 正月ある下まを助字の月むまきふふ用之始
 二月 三月 四月
 ▲月の花を花をいつこそも白
 ちてあふは能なるあく出守之
 月 秋武カト 徳カト 上段のまきふ
 カト 中段 古武カト 下段のまき
 月 又何のまきふも月と月とあるも
 同キ異キ異名ユカたりとも五
 表くさして八白ある表の月の
 白ハ 月を七白メをユカして得の八白メ出する傍
 あり表きくして月の傍に隣あきあきおそ
 表他キの月イ名の月出或は月むのた入代
 らは月あるもの中皆あふより能なる中て
 表は控振を分むとてかまてする中あは
 △助字の月 休字はし

△助字の月

休字はし

休 伏又あそりの古き花の月 花
 去 龍久をそりの名を呼ぶ月 カラ
 炭 陸羽をとりたる 夕 月 ヤハ
 助字は傍ある處にあらはるる月字は
 移るをよば白字空たあふと助字を用る
 を貴族の意を失する處に假令引上ても表
 ても社を新しめたるするんあてふ竹をす

△秋白くそに五と出する月

多後者

三冊去秋の季流白くそに花月の白とす
 年必あるよりとの抄後く

▲只抄後くす連て花表の内は白ノ下
 決して守月いさ白ノの得をすらるる面毎
 ち切るおとす一おとすの連あるあはれに
 ノイ月の白の白は日守の傍あはるる
 へきあふをひさるるこふはあはれより
 尚 日 風 石 栴 子 月 月 月 月

秋 月あき池を曲る山居 一井
 小文 秋市人の子る夕月 史邦
 美房 ちふくくの火を草ふ夕月 正秀
 世也 さーて月を産くあのみさ 正房
 白 杖もやうく陽まの月 許六
 东山 灯のとみさても先月秋之 一登
 其仲 五つ月を化移くる武老一人 三和
 保 古我坊月も秋に佳つたり 嵐三
 一か 又起ておる 御き家のせね 権権
 △折鶴を産る月 吉乃多者

雪の月いり白き子一也定産とあすいか仙二
 不いし 何れは白の中侍に又ウハと一う
 街 八景をかくす折秋の月 城人
 僧 月もまをまの念よりうれつ 五天
 折白 ちう山のちり月の一ひら 独不
 翁 よのあると何とぬ月 木角
 雅 野のおとちり月のうさうさ 彫業

夕 早の侍を早すありあり 白桃
 キツ フもちや今ももまの 折風
 依 八景をうとる月 元代
 白 秋 秋の秋の 秋の月 注子
 乃 光る子やぬワモの 口カ
 幕 月もはつちの氷戸の下町 煮香
 ぼろ 一ちのちの おある 素氏
 雲 美くうらぬ君の 邦
 信 月をとりこて人々を 三和
 持 方ハ秋の秋より 天垂
 白 兒 あれを地をす月 栄幸
 冬 陸のせき一秋月 三和
 其 帯ナ又ひらけりるあ月の月 神五
 以 二何れ月カ仙の奉へ

三冊 月の定産とあす子 折白 夕月 白より
 内 月あるへりて 美くもあすの 雲子あり

おんカ仙の苦いさすい果のおおん

▲おの志うやあふあきさす次の何まで又よ

炭 月^{三十三}ちの^{三十三}切き上^{三十三}博の^{三十三}泣き^{三十三}り 牛

△折口(引上る月)

七^{三十三}き^{三十三} ろ^{三十三}く^{三十三}り^{三十三}と^{三十三}あ^{三十三}さ^{三十三}き^{三十三}を^{三十三}す^{三十三}の^{三十三}月^{三十三} 涼ト

笠 月^{三十三}く^{三十三}れ^{三十三}て^{三十三}を^{三十三}り^{三十三}を^{三十三}洗^{三十三}る^{三十三}日^{三十三}用^{三十三}も^{三十三} 賢角

其帯 頗博の^{三十三}又^{三十三}す^{三十三}り^{三十三}ス^{三十三}る^{三十三}新^{三十三}月^{三十三} 清丸

他^{三十三}落^{三十三}る^{三十三} 去^{三十三}手^{三十三}程^{三十三}の^{三十三}月^{三十三}の^{三十三}成^{三十三}の^{三十三}月^{三十三}之^{三十三}し^{三十三} 曉き

△異名月

在^{三十三}世^{三十三}あ^{三十三}よ^{三十三}月^{三十三}を^{三十三}の^{三十三}睡^{三十三}を^{三十三}付^{三十三}い^{三十三}名^{三十三}の^{三十三}用^{三十三}ね^{三十三}お^{三十三}と^{三十三}免^{三十三}い^{三十三}
人^{三十三}も^{三十三}あ^{三十三}り^{三十三}持^{三十三}す^{三十三}イ^{三十三}名^{三十三}を^{三十三}用^{三十三}ら^{三十三}る^{三十三}あ^{三十三}り^{三十三}用^{三十三}あ^{三十三}る^{三十三}た^{三十三}く

去 乳^{三十三}を^{三十三}二^{三十三}夜^{三十三}の^{三十三}男^{三十三}を^{三十三}ち^{三十三}く^{三十三}世^{三十三}よ^{三十三} カ^{三十三}号
頗博^{三十三}乳^{三十三}を^{三十三}く^{三十三}く^{三十三}寸^{三十三}お^{三十三} 昌^{三十三}圭

只^{三十三}お^{三十三}女^{三十三}の^{三十三}素^{三十三}乳^{三十三}を^{三十三}解^{三十三}る^{三十三}際^{三十三}取^{三十三}の^{三十三}心^{三十三}付^{三十三}く^{三十三}され^{三十三}下^{三十三}に^{三十三}云^{三十三}
解^{三十三}る^{三十三}い^{三十三}東^{三十三}雲^{三十三}ト^{三十三}カ^{三十三}曉^{三十三}ト^{三十三}カ^{三十三}す^{三十三}き^{三十三}と^{三十三}林^{三十三}を^{三十三}れ^{三十三}お^{三十三}月^{三十三}
凡^{三十三}せ^{三十三}し^{三十三}よ^{三十三}さ^{三十三}る^{三十三}国^{三十三}の^{三十三}姿^{三十三}あ^{三十三}り^{三十三}と^{三十三}必^{三十三}帳^{三十三}で^{三十三}お^{三十三}り^{三十三}ト^{三十三}ハ
定^{三十三}より^{三十三}イ^{三十三}名^{三十三}の^{三十三}入^{三十三}用^{三十三}は^{三十三}く^{三十三}や^{三十三}の^{三十三}て^{三十三}り

萩^{三十三}花^{三十三}十^{三十三}段^{三十三}の^{三十三}新^{三十三}さ^{三十三}の^{三十三}せ^{三十三}る^{三十三}白^{三十三}杜^{三十三}丹^{三十三} 女^{三十三}我

みの 影^{三十三}あ^{三十三}り^{三十三}一^{三十三}き^{三十三}極^{三十三}陽^{三十三}の^{三十三}を^{三十三}お 風^{三十三}之

西^{三十三}様 桂^{三十三}の^{三十三}り^{三十三}る^{三十三}方^{三十三}の^{三十三}より^{三十三}お^{三十三}ね 花^{三十三}黄

冬 西南^{三十三}の^{三十三}桂^{三十三}の^{三十三}む^{三十三}の^{三十三}蒼^{三十三}む^{三十三}時^{三十三} 花^{三十三}笠

難 久^{三十三}く^{三十三}み^{三十三}急^{三十三}も^{三十三}更^{三十三}る^{三十三}母^{三十三}さ^{三十三}り^{三十三}手^{三十三} 香^{三十三}友

夕^{三十三}良 方^{三十三}の^{三十三}影^{三十三}の^{三十三}約^{三十三}き^{三十三}新^{三十三}も^{三十三}花^{三十三} 鏡^{三十三}笑

夏^{三十三}風 てる^{三十三}お^{三十三}の^{三十三}知^{三十三}ち^{三十三}の^{三十三}力^{三十三}乃^{三十三}く^{三十三}さ^{三十三}よ 紅^{三十三}柳

十七 さ^{三十三}う^{三十三}え^{三十三}男^{三十三} 櫻^{三十三}山^{三十三}の^{三十三}り^{三十三}く^{三十三} 碧^{三十三}之

中 新^{三十三}る^{三十三}り^{三十三}桂^{三十三}男^{三十三}の^{三十三} 取^{三十三}て 小^{三十三}枝

フリ 乃^{三十三}よ^{三十三}よ^{三十三}き^{三十三}れ^{三十三}ぬ^{三十三}す^{三十三}と^{三十三}取^{三十三}く 堯^{三十三}丸

春^{三十三}云 明^{三十三}の^{三十三}お^{三十三}の^{三十三}草^{三十三}と^{三十三}それ^{三十三}も^{三十三}八^{三十三}幡^{三十三}衆^{三十三} ト

天^{三十三}何 立^{三十三}行^{三十三}も^{三十三}中^{三十三}を^{三十三}な^{三十三}で^{三十三}お^{三十三}も^{三十三}す^{三十三}ん 乙^{三十三}由

之、 九^{三十三}之^{三十三}叔^{三十三}も^{三十三} 杉^{三十三}の^{三十三} 曉^{三十三} 山^{三十三}リ^{三十三}ン

お フ^{三十三}ク^{三十三}へ^{三十三}く^{三十三}と^{三十三}な^{三十三}る^{三十三}さ^{三十三}き^{三十三}を^{三十三}お^{三十三}ね^{三十三} 八^{三十三}葉

金^{三十三}鈴 已^{三十三}休^{三十三}と^{三十三}ま^{三十三}り^{三十三}嵐^{三十三}や^{三十三}風^{三十三}や^{三十三} 吹^{三十三}を^{三十三}

他^{三十三}異^{三十三}あ^{三十三}る^{三十三}を^{三十三}あ^{三十三}く^{三十三}因^{三十三}云^{三十三}舊^{三十三}門^{三十三}の^{三十三}娘^{三十三}妹^{三十三}全^{三十三}到^{三十三}
雲^{三十三}の^{三十三}新^{三十三}あ^{三十三}古^{三十三}武^{三十三}用^{三十三}味^{三十三}を^{三十三}お^{三十三}を^{三十三}用^{三十三}さ^{三十三}る^{三十三}お^{三十三}あ^{三十三}い

その深の底を穿て自れを桂子玉急の乳
もかろの作をりて用されたまも掃く

△イ名カ仙ユニ

多例者

句

神 雲の雲ありあけの神の雲は 月
あつめ山は少の事の小方丈 洋云

其帯

さくらえ男 取乃多し 嵐言
取手とのまよちの采雲を

教

あつめの舟よなをかきのせて 寺角
ちるとりの傍の咲白りり

又操

袖衣取命の園を待をて 甚二
あつめ花も人のことりの 枕如

考

あつめ必瀬治の教ふれや 咫尺
桂男の登二をあるき 靴 長水

△同他キの月カ仙ユニ 異他キ例畧

是古今通武なる句も同他キの月記を云ふ

上

門妻の採白ユニ月をえて 菊
お月よむの采おちつきち 千川

了

あつめ山乃嶽を又と月をて 村女
あつめさてさすのあつめ月をむ

張巻

山をやくあつめ定くし守控て 角
月あつめ船のあつめとあく

三日

推しやれおまきんと冬の月 支考
枯果ておちすと月のま ソセシ

後

松とるあつめの月を居れ 眉格
あつめつてむし月よあ女舟 氷花

後

月の名あつめうらふ悪も 才凡

△カ仙三月短句の變格

昔月短句を其格一寸せりそく昔守

△カ仙は短月二つを三つおとす凡是中曲言
其格の曲言は變格也 かくせぬはなれとあより
傳されて出来し例又三の言の變格はすき例之

名

七 七 七 七 七 七 七 七 七 七

賣、 いさりふ夜や嫉妬の月、

髪をきる方の月をひびあぐ 雪

拾 石踏く一寸花裁の月 ソラ
碑にねて象々の月 信風
香おや。 月の十五夜 素英

、 香色くくろの口とむ月 重辰
栞きりあきき月も及び お佐

炭 眞つむ舟の窓より月 辰
月の陽々、尺麻の 門 キ角

、 身におもてうとねの月
少より冷る月のせり 口唇

孫 尺 新ししおまむ月、翁も 仙化
月も花むもやの新人 文り

、 志ぬ心もを教むお明 飲水
△お後日旅向の月 多信者 ①

同旅向に苦くねも同休に宜く尺
孫 尺 志ぬ心もを教むお明 飲水

孫 尺 志ぬ心もを教むお明 飲水
孫 尺 志ぬ心もを教むお明 飲水

、 夕月九一、二の丸の初 英
お病な月も吹きう う

、 夕月をともしおまむおまよ 去来
その月干たの茶けつるさ 月半

炭 撲し頁味る古 柁 八
そとくと校庭は虎の月有 舟

、 月おき登るそとる長 燈 三角
月おし清る真のよの中 反村

白 風をけりてふる小の十五夜 許六
そとくと麻の風をる月よ り由

、 ねふろの中よりふる葉の月
初 教免うもれて独る月 翁

、 明もる月をり掃のまよえて う
ほてを食の葉あき月 嵐

、 枝刺のお煮て喰ふ雪の月 翁

北盗 東屋より 西屋の月 松碌
 方角 南より 東の月
 去 おの月より 後 尻セ カ字
 名 裏名打をさるきぬくの月 ヤ水
 義松 月足歩りーさの表末 白之
 名 夕月お笈を後い実法て ソラ
 ヤへ あまうまおひ月のお人 系松
 伊 言飛人よ心ぶをさる月とむ 再奏
 印 後ち徳よる丘の月うけし コセム
 舟 じやそ舟うた月の内をさ 石
 格 竹障の寒き月の 夕嵐 仰徳
 生 掃帚のふりこつる月の音 桐葉
 兼藤 おぼろうちを徳寺お月 その
 極 ちれくと月の出る杉の枝 僧川
 仙掌 石の月後書打の山振と 石
 妻 末世の尻及井伝の月 伝徳
 一足後 思ふおのぬまよころる国月 似実

、 良を濁りて 陶意寺月 翁
 、 庵衣候洗し 社の月 松風
 、 扱はより月い雪井はゆり 石
 比之候は白句之カ仙は喜月二二足帝は
 次句言 祥お傍をさる月のはを刻む
 傍 月は杖とよ 東合の 傍
 む徳 文川はすつるやある月の子 キ角
 名 うし表おのさやを視ふ表の月
 神尺名おの傍おの平名短月のあアもあり
 △古式に月カ仙
 真 さくばや三井のまおはたえよ 旦多
 言低のこそ重た山し 故人
 松竹天象あへく月中そ月こそお原の姿
 宜られとして夕々芳をそ思出すは月月の
 初くるこそ一入あむむと
 又たつくりたろくの月さき 力多

とけり今月風情よるあるへうすけり
むい引上月号三出れいをを積る雑うし
挙てよきあさるを定い月あつてけさる
二月を出しう定時定のお月出ても風無有力
といつて故に其真を勝て奉り冬を流すう始
▲月いぬくおそえカ仙にあらをる句後祀の月の
皆信と三と定りきれららの月ハ老信あつて
おぼのそく月花あしうて後祀無及奥の時
あつてうてするもの何に因代用奉り橋外魚
身三む橋外祀小弓おし種始さきうて

月の竹砵の柏子葉て来る 土新

仇 八月むを紅の宮よ 田原り 支考

昔 名月の解は南なる冥奈ワセ 素文

+ 夜の居すいあるおてあふ夜の月 月将

誓いの根人きあふ月の林 秀川

おさひの宮乃けきき月月

後

秋かり 月おつてお舟仕よき多縁 巴丈

あゆい石度もえる 秋の志 九次

百句八月の傍り一葉ハ夕暮獨宿伏 東山墨壺
ホまあり 笠松七十一假の月の外もあり

△秋式二月カ仙

園カ仙の時ハ二花二月もあつてきりく表の五
句メ二月おて祀る七句ノ二月秋とする事冬あ
秋キもあつて秋キの極お仕る秋キのキ句あ
ぬ時表う程二月ワあつて苦るまきさる事
は後案第の人もあつてまも亦一度の会釈あつて
▲欠き式お侍羊角許六去来くされい三子の中
は信忠第の人は送云をきうては式を五へき
を中あうくあるものとして一葉も花の傍をれい
世をきうて冬園む支考ハ元祿八は去来う侍
後再撰欠き式の志おられいををきうてせど
享保比うは式をきうて秋キのキ句あつて

秋不白の付い大方方之とて月出て花をある
 長りぬる三月カ仙はせよ此の表を程にた
 定むる去きそ方之とて花出る付品一の目を
 表に出る程の飾あき九月の程を述べて
 又及みの不白とて季も極限ある付六月を
 表すも物一除穢た表せよ此の表も亦た
 舎釈ある一とて表式不母のほよとて
 けたる物あ人の集も此のカ仙と表式交して
 熟惟は只箱は初は只けれ一予とて表す
 のとてむえ末カ仙は月あるとて初るの者
 ありとも又可者てい余は兼少く月と連て
 季三ツへまの季の信をある程言きよる
 先妻格のささこさるをこの比より季
 各自生の人と表式のと用るは其門
 カ仙は月三にあらるをある人も持り
 解る程移を定たとするも被之

△新式カ仙表する月

ニ、 三月の横ユキニむ鳩 向 柳風
 菫、 月又又は一巾の戸も鳴く 木花

△原氏日月の位

有る途原氏行はてて日月の者ほまカ仙は
 原氏の中二面を除くおかれはカ仙の傍におす
 へきもあつてカ仙は三月に月あるは原氏に
 とおさるは三月に月あるは原氏に
 やつとて相おる人の人持る

△結考まあり月

イセ 月をわすれぬる何き月

△月面を備て五去

昔をさる 月の 凌 小枝
 月をのりて足てははる 月 観生

三正

イおるの山へ入るのおさし形 支考
 うつすりとある日目の表 行巻

与 卯月二木の野々せりきち 千川

秋 夕月一極木約寺塔の内 花柳

外故 月代のえんむねの序の初巻

花村 十田を捨て更田眺る夕月秋

花村 侍るに水くちりあき月の窓

花村 千葉なるあまも月の為にと 花之

イ名他キと廻るも白まじり

△月日星をくろくま 古今言 〇

百勝 庄君より灯籠をこれの月 菊

暑 秋の夕月の未ツある 支考

三正 まつてあけしやう日のあけ

日月 初めそのまるところは卯の月 水甫

秋白 月くちりあけしやうの月 女朱

日星 花の今更のまじり 咲掛 考

△月二月次云々 春白 多保省

春二 月二月次は字まの例そく之白まじり

△在月次ありある所へ何白まじりイ名する物と

心は通る人もあり月と月とまじりまじり

名く又白まじり二まじり海くちり何もあり

与 横癒やあきまじりの舟 伯 徳子

秋 横癒やあきまじりの舟 伯 徳子

秋 月あきまじりある 山乃 一井

秋 ありまじり秋のまじり神を月 兼孫

秋 月の中の昔は秋男は日まじり 千角

秋 月と不ありし月一は月 兼孫

白見 月月の後といまねつれまじり

秋 秋二下くろく 月代の事 周括

夕星 日影のまじりまじりまじりの校舎 菊白

秋 陸より初き 小のうく月 兼孫

ハ考 三まじりつる卯月せりまじり 兼孫

秋 等布木の底の月まじり 兼孫

秋 年守村の路やまじり 兼孫

秋 月くちりあけしやうのまじり 兼孫

秋 秋二下くろく 月二下くろく 兼孫

ヨ

△名と名ツニま
名目ヨ尺八さく人向む 夏ま
うき意ヤレいひく正月 加亮

△洲の月並ヨノ名試不燼

百

和月まろ字ユ風の南初て 夏料
月のみささ虫も皮もぬ 水
弓矢の只うもくと望され 水柳
お前の及ぬ意イを 務一函
さくくくと栗の杖風 杜良
七月何うもくくまぬむ 天垂

△青の月並ヨイ名正月試不燼

高

1 川一ツはてさきおのり 月
空のそくく田上の鹿 文州
正月も竹の杖一サ 西ま
三月も木や竹くさくさ ソフ

冬

1 美の上ユ木を木林の風 夏舟
月振のそくく 水杉

夏

振月の櫛ひく守中ヨ 嵐者
お前の竹の杖イソ 秀和
1 考くくと竹の杖イソ 舟舟
云沢も二月もそくく 新水
知契のそくく 松

十

百

是は後拾遺名不方仙の告白けまのぬら
きてイ名の月の海にあり許さくはなは仮名に
かす抄書の御あはれ二月八月と仮名よと
月とくく字の海にありとて始

いふまゝに仮名にぬらさくまの字形とて
イ名と用いば洋字と書一はさくく正月
さくくくくくくくくくくくくくくくくく
七かま支考りまぬく月並と月と二ま
の許あはれは後の会くくくくくくくくく

△月二日生の辰不燿

○辰 孫生といふ所をといふ辰とい名の月まづく下
辰は燿といふの辰は燿は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ
月二日生の辰は燿は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ
とてきやー何れもく自世お遠のりてきや

霜

孫生の世の辰は燿は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ
ふりはくく隣の人をききり 乙抄

夕

孫生といふ辰は燿は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ
ふりはくく隣の人をききり 乙抄

即

孫生といふ辰は燿は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ
ふりはくく隣の人をききり 乙抄

肺

孫生といふ辰は燿は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ辰は燿といふ
ふりはくく隣の人をききり 乙抄

△日次二月辰不燿

吉二五七丁及多

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

相実

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

皮

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

日和

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

キ日

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

浪

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

換

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

日記

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

カイ印

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

三

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

換

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

日記

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

三

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

換

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

日記

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

三

二日の日永日和教新照時中位る時天象
二日の日永日和教新照時中位る時天象

鬼松のうけやちりて夜の月 香水
地孫の秋もなき赤穂 三考

日用や何や忘れぬ大子て 佐枝

日記 窮民やるの日記の付る一 可也

書のもろく信人の家 考
乃水よきよひの園のあはれ 指尋

自注日記の表紙より此の月之傳を言はし

▲日記の月之傳ある事支考版の表三條を傳し

コハ才之を冬より一季迄の事あり

△月ノ降筆風照換新天未放不煙

▲正字の月之傳を言はし

▲正字の月之傳を言はし

▲正字の月之傳を言はし

▲正字の月之傳を言はし

▲正字の月之傳を言はし

▲正字の月之傳を言はし

▲正字の月之傳を言はし

一考 如乃始を日も自あそく 牛角

漁和の傍そす秋の傍の月 杉風

思ひて一 狩る花 酒幸

神宮の傍て時をる月のうけ 季邑

まろく向るもりて秋の山 貝葉

一層きの白や月の影一と 千山

風冷くとワセの穂揚 冬月

とふ丁の巾の厚もあ達て 熊嶺

合相あきるとり歌く百はき 神夜

小傍に集て勇つく歌 揚水

庭より陽あきとて月影の書 栄幸

花うてる雪を嵐の吹やうと 考

松のあはれと通る公家尻 邦七

月々月もあはれとて下巻を 去来

三考

二考

一考

鳥

あれくすまのあやしくおろす家
花の影さある栗の枝
新月おぼろしく漸進行て
本妻の毒を毒す月の色
哀うとりまの角力丸く
てる芳名月守は急る肥あま
先まうし使の老てくれあは
あもまのぬる人をえんる
卯のむよあまの月の何や
版志ひは内衣のあまの月
卯志う機とこそ葉う秋
鳴きまの棧格子の哀の
久しうくのあま古の芳乃月
浪安待て一おきく秋
初する二人の影のやまう
新母は乃男あまのあは
かあおおき 葉の夕ぐれ

了

花
花の影さある栗の枝
新月おぼろしく漸進行て
本妻の毒を毒す月の色
哀うとりまの角力丸く
てる芳名月守は急る肥あま
先まうし使の老てくれあは
あもまのぬる人をえんる
卯のむよあまの月の何や
版志ひは内衣のあまの月
卯志う機とこそ葉う秋
鳴きまの棧格子の哀の
久しうくのあま古の芳乃月
浪安待て一おきく秋
初する二人の影のやまう
新母は乃男あまのあは
かあおおき 葉の夕ぐれ

夕

花
花の影さある栗の枝
新月おぼろしく漸進行て
本妻の毒を毒す月の色
哀うとりまの角力丸く
てる芳名月守は急る肥あま
先まうし使の老てくれあは
あもまのぬる人をえんる
卯のむよあまの月の何や
版志ひは内衣のあまの月
卯志う機とこそ葉う秋
鳴きまの棧格子の哀の
久しうくのあま古の芳乃月
浪安待て一おきく秋
初する二人の影のやまう
新母は乃男あまのあは
かあおおき 葉の夕ぐれ

枯

花
花の影さある栗の枝
新月おぼろしく漸進行て
本妻の毒を毒す月の色
哀うとりまの角力丸く
てる芳名月守は急る肥あま
先まうし使の老てくれあは
あもまのぬる人をえんる
卯のむよあまの月の何や
版志ひは内衣のあまの月
卯志う機とこそ葉う秋
鳴きまの棧格子の哀の
久しうくのあま古の芳乃月
浪安待て一おきく秋
初する二人の影のやまう
新母は乃男あまのあは
かあおおき 葉の夕ぐれ

市

花
花の影さある栗の枝
新月おぼろしく漸進行て
本妻の毒を毒す月の色
哀うとりまの角力丸く
てる芳名月守は急る肥あま
先まうし使の老てくれあは
あもまのぬる人をえんる
卯のむよあまの月の何や
版志ひは内衣のあまの月
卯志う機とこそ葉う秋
鳴きまの棧格子の哀の
久しうくのあま古の芳乃月
浪安待て一おきく秋
初する二人の影のやまう
新母は乃男あまのあは
かあおおき 葉の夕ぐれ

八

花
花の影さある栗の枝
新月おぼろしく漸進行て
本妻の毒を毒す月の色
哀うとりまの角力丸く
てる芳名月守は急る肥あま
先まうし使の老てくれあは
あもまのぬる人をえんる
卯のむよあまの月の何や
版志ひは内衣のあまの月
卯志う機とこそ葉う秋
鳴きまの棧格子の哀の
久しうくのあま古の芳乃月
浪安待て一おきく秋
初する二人の影のやまう
新母は乃男あまのあは
かあおおき 葉の夕ぐれ

赤

お初め良あ〜〜月ユキ
久方の雪〜〜鈴の月まいて
ほろろ〜〜卯も 葉は
松栢の白よまの影と〜
まきね〜〜晴あ〜〜月のま
角力自勝は角力と〜
にや〜〜病も〜〜まのま
葉は子母の自〜〜天の合
赤の恨い〜〜〜〜
すむ月の横は遠れぬ横田川
あや〜〜〜〜をを〜〜天の
そま〜〜〜〜のち〜〜
月おろし〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜の指集
能〜〜〜〜〜の石ま
おの〜〜〜〜お供す月
嵐〜〜〜〜を分る月ニツ

夏

花
花の影さある栗の枝
新月おぼろしく漸進行て
本妻の毒を毒す月の色
哀うとりまの角力丸く
てる芳名月守は急る肥あま
先まうし使の老てくれあは
あもまのぬる人をえんる
卯のむよあまの月の何や
版志ひは内衣のあまの月
卯志う機とこそ葉う秋
鳴きまの棧格子の哀の
久しうくのあま古の芳乃月
浪安待て一おきく秋
初する二人の影のやまう
新母は乃男あまのあは
かあおおき 葉の夕ぐれ

枯

花
花の影さある栗の枝
新月おぼろしく漸進行て
本妻の毒を毒す月の色
哀うとりまの角力丸く
てる芳名月守は急る肥あま
先まうし使の老てくれあは
あもまのぬる人をえんる
卯のむよあまの月の何や
版志ひは内衣のあまの月
卯志う機とこそ葉う秋
鳴きまの棧格子の哀の
久しうくのあま古の芳乃月
浪安待て一おきく秋
初する二人の影のやまう
新母は乃男あまのあは
かあおおき 葉の夕ぐれ

赤

花
花の影さある栗の枝
新月おぼろしく漸進行て
本妻の毒を毒す月の色
哀うとりまの角力丸く
てる芳名月守は急る肥あま
先まうし使の老てくれあは
あもまのぬる人をえんる
卯のむよあまの月の何や
版志ひは内衣のあまの月
卯志う機とこそ葉う秋
鳴きまの棧格子の哀の
久しうくのあま古の芳乃月
浪安待て一おきく秋
初する二人の影のやまう
新母は乃男あまのあは
かあおおき 葉の夕ぐれ

赤

花
花の影さある栗の枝
新月おぼろしく漸進行て
本妻の毒を毒す月の色
哀うとりまの角力丸く
てる芳名月守は急る肥あま
先まうし使の老てくれあは
あもまのぬる人をえんる
卯のむよあまの月の何や
版志ひは内衣のあまの月
卯志う機とこそ葉う秋
鳴きまの棧格子の哀の
久しうくのあま古の芳乃月
浪安待て一おきく秋
初する二人の影のやまう
新母は乃男あまのあは
かあおおき 葉の夕ぐれ

仙 杖を握り 笠笠の夢 江山
橋をよけく 社おれて 菊

△古式ニ橋を渡天象畢 新しき支那の風
用へきや 但今式のたは工保へきや

△月二同時分不短

一方の時分一方の時分をせしむ 同時分短し
又時不定のおとくむ時の方時分をせしむ作
りより一宿きしむよふ言ふもいふもいふもいふも

鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿
アを向う 葉のちと及 川水
年のまゝふん 鹿の夕るくれ 一葉

獲者 秋もや 夕る夕る 拾がけ 一葉
丁より 鹿のあつ来ておる 鹿明
ヶ抱ひて 杉山 廣きおひり 友考

橋 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿
鹿をよけく 出さる 鹿身 鹿身
鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿

か夕教のてりよあひぬ 月の色 邦里

お 入おとあけい 秋のそをせ 子也
紅のたはく 鹿の青竹 杉風
かまら 鹿守 鹿守のせし月出て

笠 赤の杜よとそよう 鹿守り 赤柳
竹く 鹿守り 鹿守のおをん 紅橋
空ま 鹿守り 鹿守りの月 鹿山

夕 否とりしきお 赤柳 鹿山
今の方よきりのものを 鹿守り 鹿水
ヶ 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り

△月二同時分

△日二月射白
鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿
日のつる 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り

鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿
鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り 鹿守り

夕

夕日ニ極ふ處の陰於 昌柳
山より月ニと車引換て 和竹

車山

間や暮し日のる 陰上 玉久
雪よりこころつくらばのま 玉吹

はたきあひあふ春はす秋風来あぬはすうそ

△月次九月を来月とすの悪言

新

惟まもひ心あまる八九月 支彦
月十五夜十三夜 月 及止

文操

田之月を月と名やれ 乙由
あふもむもんのこころの 柳如

是身

芋栗と焼ひきて八九月 何声
清もあきまも今更一粒 雁

名直

葉の子代かたて早九月を 麓推
うこよおはあささきくおの 宇和

白鳥

おのろも花や柳に遠通す 麓睡
お月乃くさまわねんそ 天書

之

十三夜はまど葉も其名物 甚二

木のこころまおのそ西の月 山と

△月ニお茶の付

お茶をいお作を對する時をさきく初ま雲
ま滅これと只心もそける時より一えより夕
月おの只月十夜より子神あれと夜よりく
けむも拙むむ只法持せられぬはあまそ

一橋

横お茶を身酒く旅保て こそ
葉乃月おの味神々む 翁

山琴

村をよと春の月を捨お 若か
さきこ更けももちあけく 秋房

春巻

昔はる西の法住さかの月 抜不
まこころをうみよはるるささ藤 栄友

四幡

雪文子眼をさく月の下 原卜
お座よりよとつる通天 小

翁

秋のあつるを月とぬ月 未角
きり序々きお座をささ藤 柳是

コハ初て法持の扱心

△月と雲と花火の村

△月と雲と花火の村
又のおもひは月をさめて月と押れた花火の村

雲は月をさめてはのこるえとより

孫のきりむのすしさを月

花 川舟の橋と雲を引上げて ソラ

移のともあつてあつて月

士 月。の陸橋の月と雲と 式と

移まよ舟と雲と川と

花 花火の雲をさめてはのこるえとより

西のの雲をさめてはのこるえとより

さ 花火の雲をさめてはのこるえとより

花火の雲をさめてはのこるえとより

三 月の雲と花火の村

△月と雲と花火の村

△月と雲と花火の村
△月と雲と花火の村

分むと種との法あり 月と雲と花火の村

のこるえとより 月と雲と花火の村

毎と云末月と古とより 月と雲と花火の村

又あり 月と雲と花火の村

月と雲と花火の村

ヤハ 月と雲と花火の村

花 月と雲と花火の村

未 月と雲と花火の村

花 月と雲と花火の村

花 月と雲と花火の村

花 月と雲と花火の村

花 月と雲と花火の村

花 月と雲と花火の村

花 月と雲と花火の村

花 月と雲と花火の村

花 月と雲と花火の村

奉山 川きりなきさるの行方 苦船

未親 夕月ようじのくろくそ 耳石

、 石のまじりぬれも 支極

宵 夕月の夜更なる林わた 徒昔

あ、 あのまじりけさしそ 若

申く月のよのまじりぬれも 残人

去 形をなすもあぢのいさく かる

未 月あきあきの門あけあけ 手

八号 日わい味のけしけし 比極

未 約束もくき月又のちの上 池柳

あ、 雅飾してあゆみ 八角

未 満月よ不改橋を眺むや

比 田も同ー たり時

比 夕月の今ものまじり月おれ

△七夕は月の行

夕月合し月をける大なるあつ月さき星の行

夕月も一夜の夜おれ月さきあつ月さき

夕月

一歩 雲引くく星の通る路 似去

あつくく天の戸あきそのまじり月 比極

天向 思出る星も又月をルのあ 百阿

あ、 の哀を月さきあぢ 危フ

夕月もふねの浮世もあぢ 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

未 夕月よ隠るく月もけり 依曲

も心のかさねも母てする考懐あし

△月名不の付

多例有

早稲月と文科花よりめを付ゆるりかうれ
字信と葉就田とあなと付ゆるりさても
防とあそこのああるあ

古式月と文科は行向と寝て吉井とあ
行向と物守とされははる今の用とあり

花門とあそとる付と文科と文科と付又
あ向と居るさる吉井とむさうと園子と付

とも許さすウヤヤのほと古式あれは乃寸園
と考と考の付と一と条ととるはて付向と

お多あり古式のお柄はを助破さすお
一 足はせはゆれは足まはた秋 菊

桂の帆抱十分の月 正友
次は秋まがあら伏足も昔 似去
あのかくの浦さる月 友

木城よりさるさる地のみ 菊

井の系やあさしはあを居る月 杉風
△月の名はよく花の

文科や早稲とさるさるのり
月の名はよく人吉花と月の名をゆるるあ

矢向の行帆はとも委く尺柄を并て花と月を
抱ゆる併とゆれはさるさるさるさる月桂

男婦系の花さるてゆるさるさる
△イ名を用く古式のさるさる只正の月とてさるさる

あの日はさるさる付とさるさる又月といさるさる
月の形容ある付と月と及す

△あより月をさるさるさる
さるさるさるさる月をさるさるさる

掃除日の際よりお化はゆれ初
玉のさるさる乃さるさるさる

さるさるさるの草はくさるさるさる
とさるさるの月の名はさるさる

されりあひよりまきる月いふに執向をちるこ
 及寸おていあひの情より月いあふすまき
 △月をおよりまきくはいおれも法門人も候か
 き新工支之空位残は日早あるふまは仍あ
 らぬ初よりむは然日次あれどもを平せるは
 手柄をををける務之全日次月を燈て去
 初よりあぬるはけりのおほしあひより云
 する月トのまきるこてある一さるこを世
 は仍をまきるこて日次月残を燈二月
 をあやすけり毎まきるこを月一日月とま
 けり又まきる初よりトも後するは矢止の
 りとけりまの執格を再用けり先人の手柄
 を執りまきるこに下まきる条よま味の加るこ
 候すは遠戚さるよま味抄八条月太方まきる
 其二 諸人かりおける男麻のあて
 月を執りまきるこをむ

是又討方の一件に彼つすあひの全体より月を
 まきる白法はあは度麻の男振は是あは用ひて
 乙うあひの執向あれどもこのまの古法を依て次月
 まきるこにまきる白法の執りまきるこにまきるこ
 らむまのまきる白法のまきるこにまきるこ
 まきるこにまきる白法の執りまきるこにまきるこ
 △古き新法はあはれは月の後よあすけ仍い
 ちまきる白法はあはれは月の後よあすけ仍い
 翻替換骨まの白法を用ひてクチ入るこにま
 ころりや又まきる白法はあはれは月の後よあすけ仍い

△月よりあひまきるこを
 其三 ちりくこまきる白法の執りまきるこにまきるこ
 米のほりりもあひの雇人

たまきる白法の執りまきるこにまきるこ
 まきる白法の執りまきるこにまきるこ

彼之執り月二月次日次の執りまきるこにまきるこ

といふ星の指合の如くお方を垂るとも作し
常用と相ふと二おの字の如くおと相令とを
もまらうとも星の如くしき行合

此文も月次を正の目と相する手柄を合ひと古式
の秋分三まきとて去れと舊人の秋分三まき
しりとの是も夜分秋の資格あり自體を以て
凡て支考の文にやもあやうし多し信は旧來の
月の自體を奉るるに相もあき他何あれは
お月の名に便て月の自在を相めむおと
されは信を新月の法とるる事あり又
お月一まきと目と野さういおのまきと月は
よそ尾せり一握集の持指し但は信は舊の
お月の二資格あれは本文を合て下二再おり
スレ 干おを志て高しぬじり
門のまきと相ふ月の相
けはるい信の常用として干おとまの如きを

スレ一扱つて蘇月の相方へまきともまきとも
二の方の相程を多くし信の量あふといは
信の信といふ一扱は今に信をさすお月二おの
何何と志るい余の何の子を万化しとす
△信結文よんとあしにあさもてあ変る化せしと
こそまされれば信といは信と相字する事あり

△ 陰月の資格

九月 九月のあつと神の宮付し 三相
句 おより秋の風をまきとす 許六

八月 八月の接面白き小娘の 酉ま

本註 九月の月につらう一扱はま相ありとす
おおこして安全あれは九月のふし月と相ま
八月の相字するは信の月字に合致して
是を信の扱といふ方をと月といふ事あり
三のり合て月字の御とまらへ

陰陽曰九月といふ一月はまき一扱は方を

月より下と秋を討つ八月といふ月次を出
せり今八月黄坂とあり何の處か之月秋の
坊に信長が書を出れいそふ所の傳もあられ
毎度書寄る陸軍の月より下といふやうに
[慶長] 書寄るの款は只今の月の休を合せて月より
下といふ法を流するまじか仙三花二月の先兆
といひまゝの弟はの如用といふまじくは
その初めを頼二何の妻通みしは家門の字
去りも一人二人いまだ天孫の字は後て書寄るとい
も月より下といふ所乃の處は只門人にお
てる世の如くへまの支那のさし

△三花曰意の書寄るは月より下といふを
は後なり今一月より下といふまじか仙二月
の先兆は、格式をまじくといふは、
おこしを二月の先兆といふは、
[慶長] 風子今といふ書寄るの如く去来日先陸軍

は式をまじくといふは、
信は比は信長の書寄る、
去の書寄るの如くは、
月より下といふは、
[慶長] 風子今といふ書寄るの如く去来日先陸軍
は式をまじくといふは、
信は比は信長の書寄る、
去の書寄るの如くは、
月より下といふは、
[慶長] 風子今といふ書寄るの如く去来日先陸軍

句の物事、亦一行平業早の毛き名とあり付ま府
と陸居の御門つゝ老の熱氣を加へたる月の
席の文にて又之の冥令の神附といふ
只文月の二変格うて申書の月、走とある及
あの月、は条、三変格の事と云ひはるの何れ
今の字考より左をばさうめむはんこり

振月夜の扱ひもさむ二九条あり月、八条あり
一字も自己の道理をあす只、條、及、老、に
傍の不行止とつる、聖體の夜の變因、敷、二、母、二、再
る人あり、姿を好むと求むと、是より月夜を
敷へく、月、む、二、神、不、の、れ、用、二、何、乃、
和すへく、傍の言すへく、何、大、和、の、名、冷、あ、を、老、し
三日月夜の如法、法、之、廿、古、令、所、の、事、老、友、を、考、す
一、二、三、の、月、む、の、言、の、正、月、の、恒、れ、何、れ、い、
きて、た、き、た、を、あ、す、は、は、る、の、事、連、成、二、言、を、
月、三、國、こ、さ、て、只、世、作、の、後、を、正、風、作、と、名、ひ

或は月夜の扱ひ條む毎に、老、あ、と、射、其、上、及、て
月夜、一、句、も、子、柄、所、と、考、す、初、一、五、の、中、と、考、す、
然、ら、ぬ、去、後、を、年、お、月、夜、は、た、た、一、古、令、所、八、九
條の月、む、二、八、條の、變、法、を、法、を、弱、氣、の、能、を、
子、の、夜、の、ま、り、何、の、柄、を、何、の、事、は、二、
初、引、ん、た、り、大、和、の、大、和、あり

振月お月、一、句、も、條、も、不、嫌

且、何、の、行、灯、お、月、夜、の、考、す、考、す、考、す

八考

考、す、考、す、日、を、お、月、一、句、も、考、す、考、す、
考、す、考、す、考、す、考、す、考、す、
考、す、考、す、考、す、考、す、考、す、

日、を、お、月、は、月、あ、ぬ、ぬ、一、考、す、と、入、秋、と、つ、
考、す、一、考、す、一、考、す、一、考、す、一、考、す、

白、初、長、れ、灯、の、考、す、考、す、
考、す、考、す、考、す、考、す、考、す、
考、す、考、す、考、す、考、す、考、す、

考、す

考、す、考、す、考、す、考、す、考、す、
考、す、考、す、考、す、考、す、考、す、
考、す、考、す、考、す、考、す、考、す、

後 新多く是をよむ所 先放

和自 行方の簿をよむ君をむ 如行

作方 某君の月のきりし 花柳

保 ちりちりい降下の月 函書

この是をの部も何あり

亦凡 一紙引すりて 函のきりし 花葉

コハ何多りれよと行れり

△月字あり非月お正月ヨシ

月日。その月日早。早月夜。お正月夜。月夜夜の夜

月日。又その枯れとひる月日 占ホ

月日。櫃子くく梅の梅りり 意答

又帝 老翁の氣流連るまの月 百り

十七 老のく層月日ワリ キ角

号 ちくくきく 線乃月 口杖

号 造 凡月日早みれや 知を

母は似よきもの月日早 甚二

是は不白の世の金博く母の是きより 化社

のふよまられて 是の子を考ふる 花葉

たあす男あはやく夜りく 依は是の行行

カ仙今今の二花二月あはく ばく月日早の

又あはく打はる月日用は 是も早月夜乃

何は好く行のちるイ名の月を 用はしよ

又後けらるの行位を 是も古きより 母の二

裁入て声よ 是の文と 是も 是も 是も

又 是も 是も 是も 是も 是も 是も

又 是も 是も 是も 是も 是も 是も

又 是も 是も 是も 是も 是も 是も

又 是も 是も 是も 是も 是も 是も

又 是も 是も 是も 是も 是も 是も

又 是も 是も 是も 是も 是も 是も

又 是も 是も 是も 是も 是も 是も

三月カ仙と武の終と早く表出の正の
月を計りて武とあり守へきあり

早月三 芭蕉武と早月秋は月とあり守登

白は初出の月とあり去てイ名の月あり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり
月も秋も春の月とあり秋の月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり

夏五 今早月秋の序は去りて秋と月とあり
ある編方とあり月とあり秋とあり
去て七月の月とあり他事とありイ名とあり

▲早月秋とあり去りて秋と月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり
月も秋も春の月とあり秋の月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり

注十 秋の序とあり去りて秋と月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり
月も秋も春の月とあり秋の月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり

一 今も早月と秋の月の字とあり去とあり
月も秋も春の月とあり秋の月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり

▲早月と秋の月の字とあり去とあり
月も秋も春の月とあり秋の月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり

月次月日の序とあり去りて秋と月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり
月も秋も春の月とあり秋の月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり

▲早月と秋の月の字とあり去とあり
月も秋も春の月とあり秋の月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり

今も早月と秋の月の字とあり去とあり
月も秋も春の月とあり秋の月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり

今も早月と秋の月の字とあり去とあり
月も秋も春の月とあり秋の月とあり
今も早月と秋の月の字とあり去とあり

△オニとて笛ふるス秋

多行者

乃引葉の海へ葉の白く分
浪化
ひよちのそく定の杓材
林お
自利する遠く林を憐し
支考
町毎の奥や葉をそめぬ友
呂風
旗をよそく年暮の秋
萩人
挿さるもろり角力の関せり
嵐妻
ほ吹しおれそるくくのみき
新徒
小袖を脱ぎて秋の一枝
化
丁の声およ夕日のみちり
風
竹笛く小きあつくきくのむ
お
葉をよそく年暮のまらん老人
妻
中乃と伊舟の響るをきく
人

△ス秋三お

△サハリクヤ

白紙
キリキ
白
文一

其二

其三

其四

葉の白や三浦の秋又何処やら
名をいふと又ちる草々
松をいふ秋の緑の葉重なり
お
乃くを秋の服やまくのむ
車推
為るよふれとるの桂吟
お山
お葉の秋をいふは是れ
且拙
葉相やりのおめは墨
多木
葉をよそく年暮の
秋
葉のものをいふは風をい
け通
くくる世に待たさるる葉のむ
独ト
お即ち来りてをよそく人
孤千
おはるもあつたの秋のうらけ
拾石
候つを淋しく思ふは葉
嘘風
換入の風のつあてよそく
干鼻
葉をよそく秋の葉をよそく
細石
をよそく年暮の秋の葉
キ角
つるをよそく文舟の風
彫葉

其六

其七
九白

其八

其九

其十

其十一

其十二

葉の白や三浦の秋又何処やら
名をいふと又ちる草々
松をいふ秋の緑の葉重なり
お
乃くを秋の服やまくのむ
車推
為るよふれとるの桂吟
お山
お葉の秋をいふは是れ
且拙
葉相やりのおめは墨
多木
葉をよそく年暮の
秋
葉のものをいふは風をい
け通
くくる世に待たさるる葉のむ
独ト
お即ち来りてをよそく人
孤千
おはるもあつたの秋のうらけ
拾石
候つを淋しく思ふは葉
嘘風
換入の風のつあてよそく
干鼻
葉をよそく秋の葉をよそく
細石
をよそく年暮の秋の葉
キ角
つるをよそく文舟の風
彫葉

三お

衣るん方を替ねよわくちて 甫山
杖よりやまきと萩のまきり 杉吏
垣の萩のむも実を拵 阿翠
郊居位の遊むひ人の湯をきりて 志保
月よあつぬむもみまふも吉川 李仙
川ききあつるきき麻のきき 甚二
杖より名も風き実の入て 伯楓

△ス杖の志

多保者

丁よりやまきと乃ある帆を舟 有巳

三千

ニ表

芳雪も雪も八束の杖 二
和荊

○筆の雪をいさくおまの月

芝井

△探雪ふも初杖の日南

去来

昔ももろくく帷子の紋

三指

小打をききぬ萩の拵をて

口直

○二通 夷よりのお月杖

イ指

△又丹や丁もはらばら未志守

嵐枝

他

文月

お月

お月ぬ星のちてお月空

柿コ

ほ初すめい拵ききうもれて

陽的

△お月ぬ星のちてお月空

白夜

△月使よりする萩のまきり

吾仲

柿のこも中よりまきりも

山只

△お月の拵をお人より拵拵て

危フ

△お月ぬ星のちてお月空

枝

を世継ぎお杖下の人へ又月登月未の赤白を正月

と初すめい拵ききうもれて

と初すめい拵ききうもれて

と初すめい拵ききうもれて

と初すめい拵ききうもれて

と初すめい拵ききうもれて

と初すめい拵ききうもれて

と初すめい拵ききうもれて

と初すめい拵ききうもれて

と初すめい拵ききうもれて

かくつらるる月を昏林にすす付のたこ

考へ 句探し他きの月出さる付まよス林にすす付

▲他きの月出てス林あつても又あはれあつてもあはれあつ

▲又ス林のちい古来も終あつてあはれあつての月さるる

よ通し林の月出をけりて去林のち終くへ

▲三古云く蕉門は其さくあきさつ流るるをさるる

其方の月くス林と通し事を終てス林につけ

あり林に引れて終るく却てス林の終るる

又ス林と他きの月と終るるもあつて又他きの月

出てス林あきつたるる

○ロキ 青峰のまよを又あつて月 月

▲秋風の情多秋終るるて 嵐若

▲陽底の林を障子めりさ 牛角

▲社日束らるるまの深さくや 方丸

▲山元の梅白くすむ月さるる 月

▲乃さむき初のお裁の林 家皮

ヒト

秋風を遊さるる 裡度若 以節

あつてもおの目足さるる 陸子

あきく痛の方を下さる 千川

○ウサの月を今を干さるる 志守

▲よ西風をつけてゆく 葛森

▲林をくまふまよ肩れて 花

▲スよのちを答へるる屋なさる 森

▲あきさつるる下ま 乙春

▲松葉のまて来れま投て 一有

一掃

はまの月出ぬ先は空府のちス林出さる

▲陰てゆくそのまよも冬の月 その

▲社の出てゆくおのちある 嵐若

▲あきさつるるあきさつるる 吉原

▲冬の月白くまよる 柳花 乙由

▲あきのまよの何のまよあつ 水甫

▲あきさつるるあきさつるる 仄止

▲あきさつるるあきの 秋風 季風

東巻

八分

東山
台

藤月おちとあつと文りて 木因
あつとあつとれい面白き杖 木石
松花葉の木細葉 追重如 遠也
依る者あつとれ時と初らむ 子

△石のユス表ニス杖一先る変格
スハ 藤月おちとあつとれ時と初らむ 子
一先るユス杖ニス杖一先る変格 藤月
風の雲三度の花とあつとれ 子去
流流一先るユス杖ニス杖一先る変格 子去
嵐文破十先流流一先るユス杖ニス杖一先る変格 子去
流流一先るユス杖ニス杖一先る変格 子去

化

スハ 藤月おちとあつとれ時と初らむ 子

或トユ大あての松葉生とつり 峽水

□日ノ藤月おちとあつとれ時と初らむ 子

在菲茂 天象日月日星のくく毎年おちとあつとれ時と初らむ 子
も各熟の人日ユ文れも人佐ユ嫌さるるも 但

身影ノ天象とあつとれ時と初らむ 子
字の乳押門は毎年流流一先るユス杖ニス杖一先る変格
流流一先るユス杖ニス杖一先る変格

保

衣るの藤月おちとあつとれ時と初らむ 子

蓄

ひんりと一ツ折りの 子

茶刈

は宮の陰るユス杖の花あれて 支考
杜の下とくあつとれ時と初らむ 子

藤花

おれも子身とあつとれ時と初らむ 子
おれも子身とあつとれ時と初らむ 子

風

早解る葉を藤花一葉流 考
杖風流る門の君とつり 子

ヤリ

おれも子身とあつとれ時と初らむ 子
おれも子身とあつとれ時と初らむ 子

●日1月次

冬

白く雪の世の玉さ杖立て 酒を
雪の折れし一木の枝 支障
西のつらむい雪のまゝも 也作

秋

夕日のみちの光りも 為旧
むねのおね人あゝ花 不柳
風のそよぐ山吹のそよ 管小

天

すむ水う天の降る林のくれ 殊妙
おも南も 石ありり 水

夏

居眠り多の日候は 釣等
△日1月次 枝不煙 貞まき及多者
立あゝる雪のま下のま日くけ 如行

春

後木におろす竹の枝 支考
さき山の葉を干ちたる六月 行
あゝ日よけて入る日よむのそよ 柯白

冬

正月を毛の生るま 白ね
何くもんもねん月 後若

冬

あゝ法の降る中を流あゝ 加枝
西日さゝるむ寒の深さ 考

秋

葉のありく日いりとき 玉三
翔よりもまよふあき花ん 甫杖
さゝるこれ山の杜の三月 考白

秋

△日 三ま
夏向も世の隣の目を交て 扱水
日よ候て宮木の屑に泥よ折 治後

秋

村よ一日の照あゝ冬の日 考
乙名も日和を曇るまのそよ 小
甲の雪ちまされて西日もうけ りお

冬

△日 1月次 二ま
白田の川乃日よそれあゝ 及朱
ま春の日の本候返すは 園友

冬

汗く几くくまゝ 日のおゝ 千中
教あれて暮の家あゝ日よ承ゝ 以ね

カイ印 卍

△日工書の日次裁不極 多有

夏 ぬれぬれ 尺巾ももろ 天竺
高う先よの中の大さうと 念風
ふろふろしてふ日の照るわら 雲

月次裁工部 書をききそめも同

△日次二去

冬 約稿工西茶を流し日のくれ 力考
窓の日のとさうらのとと起て 翁
日くくれとてい 又明くを 由格

り 掃 ひよもの日雇う壁の柱を糸 五相
日雇うもあの大工くりり 甚二

立 晴る日工果長一誘いりり あり
手さく捨おの 柱日 阿常

春 五ううの氷さもたの一日に 五考
夏の日おの雨さうさきり 嵐七

目 杖突のちえもきぬ日雇も 聖杖
△教字日次二去 〇

白仙 杖もちちちちとてふくれの月 三惟
情のゆん 百日の山雨 〇

り 掃 三うはあけす茶い一様 涼ト
源和の位吉信 十二叔 仁行

に 湖 三ヶ月さあおのるす取れて 桃三
けあくも大と 〇くく 〇

高 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
△日次工地名月日号裁不極
御書を量候まきり 草 枕 舎荘
何とふれゆく後者の声 知是

白 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
ゆる日雇うのの約未 小枝
古おし成く白まをふり 湯 教書

日 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
日せう 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
来名くくそそ日永のまあ 柳コ

文 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

只イ件字書の例もあす情字の教もあは日次の

文字の多用を辨せしむるもかき加ふて字の字の例に效り多用するも字を益目とて字の辨り

△日よきふ付白

東花 海よりまわされてくちのち 木守 徐子

△日よきのふと専形阿銭不嫌

はれ日字をきく日のみあり 昔物今物 御歌詩

解立即新のふみれ日字は嫌す

徐世よりふのまゝのまゝ 香静 丈和

山

たをきすく付ちあく 物言

陸橋より日和舟のきし合て 物言

三匹

きのふいふまゝに人 汀花

杉系に夜を居て標の花 菴山

桃

日やけくくするに 例をいさひ 侍業

あゝろの先くまる侍 侍業

△時々明く各面ま

朝日おねのあゝろ侍 南吉

茶

茶をくくり吞てくくろ 支考

身よりいそぐくろある庵 桃りん

浪

親又の白りくくろ 白和

まおろ何やうくくろ 密水

飛

飛仔信より出きてはのそ 可及

糸すきのりふの付るく 可及

乃く又ね系に西も 可及

梅

ちりいそぐくろのまのま 可及

那の用意の床の生花 可及

在

△同作の日おま

そりお白きくく 可及

まろとお白のむくく 可及

カイ印記

三匹

浪 ウチの日暮し 山吹の ひと 知

見し あ一人の暮の日はもろくつく 山之

粧 あふ子 枯木の 松のお目付 彫業

目夕 ま日付 暮るあふく 開けて

△四季日 折去 古今白

〔密〕去の日ニ永き日 昼日 面をうて又ありし

市街 大板の自慢 梅より 妻の日 ヤハ

髪も 結すよ 折ふ 夫の日 季

□ 星 面去 古ハセクモ折去

星まつ 心 沙を 屏よ 屏よとも お花

其節 星を 折るるう 徳社の 婿友 気者

□ 花の事 文庫一正巻 下非正花

〔密〕月花 風舞の 胸くは ちり 白句に 折る 花を

花を 折る 既ハ 八面 月この 月を 准て 花は 月

を 古今の 名目 ありと 名残の 裡に 花は 中を 宗祇の

比 知は ありに 花は 七月の 定式と あり 折る 月

花の 白り 二季の 行るの 中より 昔は 正月の 恒れ 恒れ

を きて 折る 一は 折る 世は 折る 折る 折る 折る

○今 折る 月と 花の 暮の 終るを 以て 林の 清冷を

し 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と 折る 月と

陰中し香と杖あつともあつて或は花やむじの初
を杖式も花あられい古抄も胡亂のさゝあられ
正花の注ぎ及きむ正花武の香の花きとらふ
初も香あむの積もむりくむ沈のつる殿成
似て今の化沈も積もり正花群沈守り不し
月もむも昔の初めあれを今い海の花と志す
但し旧式の花注ぎのむも味のももまきりて
種あつあつとや一日の及ばれをまねと今も香
家の武月二花の通の坊を今ねい史書のよきとて
大さ宮守坊をまきりて種あつ決す

唐三分海通身よ花の浪正花の浪のむ正花は
あつと今今今通式してたあむむ花も白雲の
花後上高きむむ花のむもむも花後上高きむ
あれ注あつ正花も一花れと古式正花の格
まねいさる古式正花もや花の花後上高きむ
ろきもぬむと一花のむもむも史書の事

あつと花と草木のわい名をさるるも時正花を
及くと種あれはむ云種て今正花注ぎと史書
初一花あつは白雲よは花の浪の故種も花用
半花してや一花の底厚を許さ守新二世の底
儀を個ひまぐる世の明望を待たあつて一花
之守り正むのさる今今を何て分あす

星月星月時又月日キよめてまきり史の制あれ種

と子月あき種は種花にキよあつす去去の判
も初種のも種あつあつさる花もあつて一花
付さるるわい史れい人とあれは花の三花あつ
よ去去とて史れ及々の種あつてむあつて種
末の付史れの花種もあつていさするるそ
や種あつとも種あつて種あつてやむいさやけ
れよ種むも種種あつあり後の花も種あつと
後の史書も生れあつてや又史書の名ささ
ぬも去去あつといむむと一花の種あつと

ありし抄くすまよすりるも文意のさしこ
 ▲系松の種又文より理あり二似れども三花細
 葉花の位及支那の位をさるるなく去支那の
 文二癖おそく終りきる多しきて「**圃**」入秋
 の制ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉お多し
 いうも又雜月ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 くれ又花あきく去出するもの種お清り所
 雜種種のおりたる位ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 陽の正巳去出するもの種お清り所
 又非種花ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 敢て形するのこ種いえより花より何あり
 ▲正巳の玉花種の花やまありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 正花ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 ○
 ▲正巳の玉花種の花やまありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 正花ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 ありし抄くすまよすりるも文意のさしこ

とう佐古今抄の今抄命の西下を老く正巳の
 子いとも字用持りてあると定むるあり
 明くさるるも他の句を許さるるも
 自らの句ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 葉花の位及支那の位をさるるなく去支那の
 文二癖おそく終りきる多しきて「**圃**」入秋
 の制ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉お多し
 いうも又雜月ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 くれ又花あきく去出するもの種お清り所
 雜種種のおりたる位ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 陽の正巳去出するもの種お清り所
 又非種花ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 敢て形するのこ種いえより花より何あり
 ▲正巳の玉花種の花やまありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 正花ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 ○
 ▲正巳の玉花種の花やまありは正巳の初旬の葉よス杖の葉
 正花ありは正巳の初旬の葉よス杖の葉

△非正花お

花見花種 赤き花 花見お精 花君咲 花身外
 花種花畑 花種 草花 秋花 正巳 月乃 花見
 風花 草花 花種 花田 花見 花種 花種 正巳
 浪老 師のむ 花種 草花 花見 花種 花種 正巳

花ゆり 灯のむ火花 咲くは花やうむじ花子

化清 一花さくら 二もん山吹 千去

乃ちや乃ちひりけて花極

白や花極と極くとふんそ一山一繩手おの
花さるは寸付もむう一身のほく始

新唄て岩根の赤きむほぬ

夏五 けまの花たてて花浮を何や云根の赤き
花とて決て木匠はじとえおれ何の名ささるむ
おれおる極や極むと子好き極き用う始
▲属さ正花代るすは流て花さるは正花とせぬす
なされいやめい木匠はじとえおるむも正
花さけり赤きむ一非正花とめい知する方よし
空に極さけり何れを正むと人の歌あむ
よ 志る葉の花の身と名さけり ちあ
山 花野乱るく 山の虫月 ソラ
江 瑞命もむ花や雲の白せり あり

佳書 藤のあつ川花は花吹て 一花

蕭州 白考ふあむむきや月の月叔 叔重

三笑 杖のゆふはれてさくい何の花 接東

野 草花の云お後おまむ花 茶後

節 又巻う後花葉の花吹て 胡中

冬著 下と田の花も乃へんまうく 太夫

子百原 月をさく雲や千この花 除風

志栗 又幣文より花をのむ極 方丸

三匹 杖のむら枯るよ小柴極 水甫

白見 杖の花とち切ほの 桶 嵩山

東山 花後初り 打筆の杖 东怒

十七 陽富とけく月の花さうり 五妻

句 けのころんらん 杖の風む 岱水

舟せり 風むよ曲へる火のちりきて 若

尺幅 雲ちるや鳥ももよるる 山 东若

浪 只花の又や只きく雲乃雪 二川

只、字、寄、へ、ル

十七 匠で歩る列卒よむさく雲の空 大去
 峰ささのむさくあやうし 五去
 文 蒸葉つむ畑や春の桜花 以花
 皮 ぬくもさく花さくおえ 涼ト
 分 芳くく目きくあふ花のむ 之川
 浪 陽のむあくる杜乃 神風 倉花
 窓 む粒連を久くくつてのむ 竹巻
 窓 松葉より心のむささくく 柳瓶
 柳十 春葉のまきあを揺るゆてま 有葉
 鳥仙 とらうと水さきくむ葉のむま 莖角
 位 花子さくくさくぬくの袖 キ角
 合終 物花よあて花子もぢうはれす 九阜
 △正花は有名を三去 七乃至多者
 有名と有名も三去コハ字去の傍く
 三やうとすうらこまむの傍 因民
 卯のむさくはてすは花さけ 涼ト
 卯のむさくはてすは花さく

山 下 ぎうけのむの生さくやあれや ウ中
 けのむ仏の目とておちしし 匠吾
 月とあふぬのむさく原居く 鼠毛
 けのむさくもえさく候せう 旅人
 保令て花工牡丹のむさく候 仙呂
 むてあふそむを病後の又付 季俊
 おうくと花さくそのむ候て 芭二
 花のおのさくぬさくむさく 東忠
 柳の花さくめて柳のよありす 白ね
 葉花やむさくさく葉の 栗ル
 花おのさくさく花さく 占ホ
 不さくさくむさく山のあふて花 花
 むさく花さく花さくのおね 芳丸
 ちうとむさく花さく花のふ元 以之
 中花も花さくむのさく葉 洞和
 月のむさく月の月お花さく 侯石

青

・ 菱おとすて物く萩の花 松阿
・ 木の枝より花をそそぎまはて 風之

白

・ 多るんこと遠てむ月のかげ 後若
・ 門外の花あそくく梅を 支考

赤

・ 矢もくくぞき一月と梅のむ ウ中
・ 果樹の上より始て赤の花 夕布

△ 非松の花字紙不嫌

文様

・ 袴互故く杖も寝る松花を 壺峰
・ た方も土石のくんとてあく 甚二
・ 初より人のんもくろり花 方堅

△ 去正花

多者

花供花法花会云やう花 花生 ハニハニ代ニ因
タル名

作花 紙花 屏む 作花
花紙 花紙 入る
花

花の敷 花の
敷 花のぬ 花の
ぬ 花のぬ 花の
ぬ

はる多也言のあねく母も用寸

三年 やすいもの 号も小袖も 二
類 花長も浮世の泊の 作花 料柳

長 孤むよあはのえとあしー 逸冬

其帯 咲むもやとすくくくの去 嵐吉

飛花 独語とあそくく娘のむちうて 二

之、 花むとさるるそとそ帯あそくく 昇角

中、 赤髪のもく再さくものり 隆沙

其帯 あくあそく入わくくく花のぬ 雪

百端 川供と花紙とけいも花ん 霜

花ん、化しうろいあきくくん娘きくあす

△ 他季の正花 一三二

独花 菱花 花紙 花紙 花紙 花紙 花紙

花紙 花紙 花紙 花紙 花紙 花紙

花紙 花紙 花紙 花紙 花紙 花紙

花紙 花紙 花紙 花紙 花紙 花紙

花紙 花紙 花紙 花紙 花紙 花紙

花紙 花紙 花紙 花紙 花紙 花紙

花紙 花紙 花紙 花紙 花紙 花紙

花紙 花紙 花紙 花紙 花紙 花紙

さる氏 花火灯して 星あつて 乙 子
 あつて 花とさうさう 草の一穂 千角
 草あはれ 花下押さるる 花正花 草と花の伝
 百仙 迷惑おわい 今草のむの伝 天宮
 ・ 草は今とむある角カうて
 ・ 杖あはれや浅の百根とむの花 伝化
 新 杉葉の木の草とむのんそを 挙白
 夕 木急や枯木うむとさうぬ伝 之川
 夕 花の柳も 杖を去 杖傍
 炭 草之の柳は杖の花のみら 口伝
 花を草花と伝はる 去秋合伴のむあはれ
 草あはれとむあはれぬ伝はる けさよとむあはれ
 竹の柳とむあはれぬ伝はる
 ▲只一箇のんゆく 草とむとむ 伝ある一 伝はる
 去花とむとむあはれ 只月と分む 白草の
 草のんあはれとむあはれ 杖と決するとむ
 白 打とて 花入 柳は 柳 杖 為

拾 花を草とむとむ 柳の草伝 伝化
 甚 用とむあはれ 花の 笛を靴 力ろ
 三 風うけて 花の ニツニツ
 一穂 大味とむいんのむこー 仙尾
 難 伝とむとむあはれ 柳伝て 伝角
 草 ちれとむとむあはれ 草の草 伝角
 草 草とむの草や 今とむとむ 伝角
 又 口切と草の十穂の くり候 柳如
 △花と草と用と草格 伝角又入
 冬 たい衣圍と草とむとむ 柳伝 伝角
 草 草人も草とむの草とむ 柳伝 伝角
 草 草とむと草とむの草とむ 柳伝 伝角
 草 柳伝 柳伝 伝角
 草 草とむと草とむの草とむ 柳伝 伝角
 △月花結とむとむ 伝角
 多伝角

花月花結とむとむ 伝角
 草とむとむあはれ 柳伝 伝角

すー甲乙おる月花引新で宣う守

▲花の月花は時花は月花は月花は月花は

又月花を花を引くは結を其外もさきあり

月も花もあふよふ用あふぬ花はけりさ

おとすくはかりくのたひオニのまへ

あ ^花 月と花は花の言花を少うて 菊

化 ^甲 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

枝 花は花の言花を少うて 菊

与 花は花の言花を少うて 菊

お 花は花の言花を少うて 菊

橋 花は花の言花を少うて 菊

浪 花は花の言花を少うて 菊

高 花は花の言花を少うて 菊

車 花は花の言花を少うて 菊

イセ 花は花の言花を少うて 菊

ヤハ 花は花の言花を少うて 菊

ひき 花は花の言花を少うて 菊

イセ 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

花 花は花の言花を少うて 菊

奥 初むはの通とくりおて 支考 巳百

茶 ちるむうき化秋のふ元 以之 初春

他 ちるむうある後の戸をひらき 信化 石子

△他キの橋と花三去

元祿 ナ 橋の文と橋の字を深て 古巻

冬 ちくや社この花さくり 古巻

り ちるむう山橋と橋えむ 力号

△同キの橋と花三去

去て只一あるべきや異件は何の如き定守

全巻 花と橋と花三去と何の如きあり

△同キと花三去の何いえあるは他キとて多し

他 ちるむう橋とて手なる橋む 梅歌

おまの表七メより去出てゆはあり何をせむ

△定守の橋と花三去

さるさむうは花とすきよありおのうきとて

カ仙ウエメよ迫る花とすきよはとて花とすきよ

何れ秋なる大風夜分た天立るも花の何れ

何れ止花とてあわく何れとてむうは止花と

何れん不用く何れん何れん花とすきよ

炭 ちるむう雪とて下り去守 古巻

何れ花とすきよとてはは雪とて下り去守

正花の対はあは通例の白く青更中へ花字
を八つもの正花を花計りよき付に扱方
もも一りもあく出ぬるもかきあれぬ

△花のたのめ

▲月むむたといふは分命の舞文に讀して七白ノ
十白ノのちむまを宣花寺例は更なを付に
月花のたを必寺にむ七目の武の細にされと
真の表八白白下ふふ花をきき通といふ

▲花をきき不表は白メより花をカハいなる百
白五のむむむむのむむ及ニウニウのお信と
奉白を末たとして寺二三條の表の信の苦
くは又余りのこよおそむむ或は白扱方
そまは花をまむむむむむむむむむむむ
あり但る白白中の花は引よるあり

キノ
▲花のたのめ 杉風
▲花のたのめ 徳水

化鳥

白むかおほりり小まの更のむ 佐孝
花のさうり二町中をよふ 翁

△花のたのめ

長ラ

花のたのめ 伯楓
花のたのめ 有梁

イセ

千石の共の花もろよふら 八至

花

花のたのめ 花のたのめ 花のたのめ

花

花のたのめ 花のたのめ 花のたのめ

文月

花のたのめ 花のたのめ 花のたのめ

初打定花をむむむむ表よりむむむむむ
花のたのめ 花のたのめ 花のたのめ

△花のたのめ

花を引よる二ふあり一は花を教すき人
おそ更人花をむむむむむむむむむむむ
花のたのめ 花のたのめ 花のたのめ

▲市へ出るとする時友人花を辨する人ある時又
 英をけり次は阿次次に譲りて終り去るる時
 花をたよ乃らるるありしに定たりと去るる
 ある所のるに花をけりて出るとして花をす
 又二ツの貴人知事ある他は儂るる人もある
 ちよくあくる時花をけりて花をけり
 ▲よくあくる時花をけりて去るるありし
 又あはれ時五二二つこの句をあれは辨て乃り
 何方より引よて作は徳ある引よて後を他
 老くはるのちの痛みの会ひたの極古まの
 ▲痛みの他は命又祝の会ひ
 又さう代る花ありは花をけりて人の句を
 き付あはれまへて花をけりて
 ▲この花けりてあはれ時花をけりて次は人
 代り花をけりてけりてけりてけりて
 月花けりて代りてけりて又花をけりてけりて

又去るる時花をけりて去るるありし

他はあはれ時花をけりて他はあはれ時

かくもさうさうさうさうさうさうさうさう

花 花のあはれ時花をけりて花をけりて

乃らのあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

花のあはれ時花をけりて花をけりて

●花の居る由

修 中々知るやむい去の由 李下
花のまゝもシテ 花より 一船

△峰出を待ぬ花

多者

艾條 花としま来やとほ遠くし 扇

松葉 花よのちおどしと元身 兀峯

カ仙ウセ月たに花入代る 何多かれと思ふ

△花お後る風ふ苦

七下及書者

花お風を許すは祝式の心は之程苦い老

除て自在さゆるるをさすは徳を世風もの白

未実の花を毎に出るくさく香れおとふ花

有実 ちも ちもさくさく 村ののあー 柯山

再くふりやる ちもは飽ゆる 支考

ちもさくさく ちもさくさく 十丈

ちもさくさく ちもさくさく 言黄

ちもさくさく ちもさくさく 観水

ちもさくさく ちもさくさく 柳愁

種十

際 柳 柳の居る由 柳の居る由 去来

勻 花さうりつれく 草を引出 許六

花さうりつれく 草を引出 糸袖

本丸を打たて 又々花の香 其結

まん合おのつく ちもさく 辰化

お花の徳を 備へ 柳の花 辰吉

柳をおろす ちもさく 子

ちもさく ちもさく 東彦

ちもさく ちもさく 若相

ちもさく ちもさく 外丸

ちもさく ちもさく 秋彦

ちもさく ちもさく 伯根

ちもさく ちもさく 千川

ちもさく ちもさく 口連

カイ印に

●其

拾

ちるむを待せて月も山際より 桂楫
まうら車風の夕子所も 叩陽

名

三石の申朱唇子花さきり 尚白
ハツトより去の吹降 霜

△風まらむ秋ふ煙 多者

浪

秋風まゆを吹残る 陣声 跡ま
まうらうは守居の芝原 え妻
むは皆ちりて候くおのま 一吹

△花若居名は不苦

お六丁を月よ名はの村と叩くお居の煙か

されどもおようお居の村と叩くお居の煙か
も許さきと又立ちあつた青のよ青のよ分るる

庵

根を丸を花のよりの 由
よの山橋くくくく 橋 許六

飛上

関白のお成のむの候くく

小倉山嵐くくくくく

朱山

白羽のまゆはちんすの川 葉邑

三平

他の通 花のりきり 木因
約を中不こと吉のさ二五帯 葉
雪をむとよ又ぬむの雪 葉二

り拂

まのくく 神も守るて嵐山 由格
ままあつれむまあつれ 叶

白湖

志葉の芳の初自候々 叶
月まう梅も二五の伝之 彦え

△二五二白のむ

月花を待よ 他キの花 待る花 正花 橋 葉

右おつ内一ツ先片ハ白句ニテモおハセス
葉お花 風おけるむ 名おけるむ 葉は橋の村白

神尺名名不表に葉おむ 葉は橋の村白
及外同件に葉おけるむ 葉は橋の村白

名

橋まの木のるを花のんを也 葉白
三度まむよの橋よの山 仙化

ゆはひは外よ

△同執向の冬妻格

去と枝 花の教室の伯ははせりり 口通

糸 入るてあそりきりのむの鼻 子

やへ 花の脈めむ不二の給を云 糸柳

新乃子む芳あくるの志がのむ 示右

柳登 花のいの使あれ 花の花 布胡

さるさまとえぬとあまう 壬生あむ 巴弓

拾 花の傍り花より傍り人も来す 菊

むとちり男の妻重吉の隣撞て ソラ

かち 花の下の花のさる穴うの花 跨吳

まの未冬より砂て 池の花 奈古

柳干 山門は大木の花 咲くこれ 西哲

むさけい山の奥と旅ひて 呂杯

天阿 花のけい当さくぬ先も花のき 衣お

候季よりうむく 花の花吹て 船曲

笠 花のさされて花のむえの石骨 尺銘

花のちをむえ旅の竹没 りお

一石の風信おの付机異あすてん皮てせぬとて

夏もはあより夏もはあより生かすきりきり

△雑花変格

いふあはれ筑紫の人のさつりも ソ重

根子 古梵のセグき 花血と花 信風

ア桐の声 鈴のるるは月足窓 花相

花の柳櫓をちる窓うもむせれとて一対り

花血と花と押されいたるくきと続へきさる句

この花のきさるあはれ花は初より

一皮あつるのり二皮もあつる 小枝

白多 花のむ枝のむ枝とむ枝も 支考

胞ぬものまゝ夏敷とらう 信若

拾んでくくすきもきし 欠音

七きし 花の梅白子の不改花咲て 凍ト

花をくくくく 花の信後あう 貝宗

金鈴 花の火より別て 新野守寸 常久

花の五月の枝より世を尋 仲二

花の込れて除ぬくまのい 其若

よしゆりう末てきくぬ山椒 菴南
白仙 花連も九九のまき花 天香

大なるのちん又ても又ぬり

是等正き花と作りし物とて 花のあまうにあれば物格あれは母てん寺
但月花むお屋あてふ白の物なれ

ウ 作花母乃きりむと何て 山り

作むし物のおあれも大方まを階り

本物 象おのむもろとん連りり 凍三

コハたあくまあると何れも物もやまて

かみまの幾い花よりなる

花のむし杖よりあまうあまきるくカ仙ウ
ハのより月杖と作るけら土白ノの花ま及
うさうさうあまきを踏るたてはまら物むを
物花よりまきて入まをすうの物花
花舞も秘受の何て物正花とまを

ゆくけい又ま花とふ

▲は花物取之月杖より花のキ接い常之流のこの色
キ接いあり花の何と物と物も季時
又物むの流し必又まをすはトモ物花とま
三まはトモ 又花物取太方物花と物又は
物も花より入るまはまら花あて
まねぬ物あれまをむ方よりむ花物ま
トモりの物と正花とあて

△花物取之極物の花

花の定花は水仙花物取極物の白を物とて
花むし物。花より多く花あて物さうの候言
其の作て返りかき付いみし物あてのま
まのまを花と物とてまを流るく物

▲又古式の物及物手もまを流るの物
古式まをさるまを再まを物とて又一
白の花物正花とあて物極物物取

本朝の許さぬほど君をなげけし本朝の
中夜もまた花をせよ草紙の苦うし

△梅を正花する資格

新
三度ふむの馬の心 仁化
おと身ふむ心あり乱世の伴と見え天はなる力の
三度と身ふむ心と心辨あり只その身も辨
され辨の光さるべき力と授受の世を欺く付
あり故に梅といふはけしむべき

去来むむ梅といふとく日かいう末日
凡そ梅といふはけしむべき二通なり中
早きむむ梅といふはけしむべき日されむ古人の
思ふの内一むむ梅といふはけしむべきはあり
されと身なる梅といふはけしむべきはあり

去来
とけしむべきはありと実あり

梅正巻
先づ口決り正花ありとくも又后文を用ひ
去来一去来梅といふはけしむべきはあり
解りて梅といふはけしむべきはあり
とおくべきは正花といふはけしむべきはあり

梅正巻
又梅正巻といふはけしむべきはあり
よむとくも梅正巻といふはけしむべきはあり
二句の梅といふはけしむべきはあり
ありとくも梅正巻といふはけしむべきはあり

梅正巻
梅正花初人の人なりとあり口決りあり

梅正巻
梅正花といふはけしむべきはあり
梅正巻といふはけしむべきはあり

▲定花を梅ありて村の手柄なきふりて百
 も陥く仕立あり梅より一輪ありむ但花
 を引上りて寺堂にありて又其の傍に花を
 寄る伴去の穢つら下り奉るに何の如く
 花と垂てもよき句出来りぬありむ
 六八節 乃句の花田中あれいカ仙い乃句三ア一乃
 句初より一申よりい初より一申よりいされとも
 句の定あれい定一申と中古已東室れり梅より
 初初より一申ありて名程よりいさむありて
 よ句初よりいさむ花あれい梅田の傍を立
 て梅より梅されり
 ▲色う梅ちち梅よりを怪て初初よりいさむ
 をとり初初よりいさむ梅よりいさむの多梅
 又さるや又梅よりいさむ梅よりいさむ
 や又カ仙い二初ありて百句の梅よりいさむ
 句いさむ三初よりいさむ梅よりいさむ

採梅正花を用名本式白花より取るありて寺
 ▲只連号小山句白方九初人梅よりいさむ山梅は
 梅よりいさむありて梅よりいさむありて
 あり梅の傍よりいさむ

梅 乃ちよりいさむとち梅花 木因
 小文 葛屋よりいさむ梅よりいさむ 養信
 秋百 梅花よりいさむ梅よりいさむ 水甫
 文隆 梅よりいさむ梅の仲間梅 僧家
 けに梅よりいさむ梅よりいさむ梅よりいさむ
 梅よりいさむ梅よりいさむ梅よりいさむ

我園の梅山梅 咲よりいさむ

五五 梅よりいさむ梅よりいさむ梅よりいさむ
 字よりいさむ梅よりいさむ梅よりいさむ
 梅よりいさむ梅よりいさむ梅よりいさむ
 梅よりいさむ梅よりいさむ梅よりいさむ

用を新しし絶妙くされとも是を再々相めむ

白きとよ梅は伴達の得るもの
是れおもしろす尾上のより也

良きといふ山の麓とくわ和舞と数る種類として
此のの早き花を隠せり物よりは善のむたを
あてられ伴を伴ふは梅は花にたされと定まると
いふにむとあや梅はあや梅はあやむと合
これ又梅の肉むとすきも又花の良伴の
一決せり但尾上の二字は江戸の善の意を梅より
△三花一曲の信あれ再すもやあれ信は如花
を伴むは多神あり但是もむを合すとてあ
そ又花は正花とて定たり他は難とも梅は
これとさる例いあるは肉むと伴と又也梅を
も去のむも中正花あれはむと花を行一陰と
あし物して善梅の信は古例とて初て後已と
うあ行もて初しとて行もそのこ

△花は梅と針梅はむと行の曲言

本古より花は梅と行りも中傳授ありとて初ん
は許さる或は梅類のれありあむの花はあき
梅ありはむとつくへきと但是は梅ありす梅は
あきさるはあすといふ事家家の傳授の端

ウ 幸傍乃松は花より梅より 翁
山を梅と表ある事 而 千那

傳曰き梅は花の人の約ありひの言根の
むとあるはとさる勝るより幸傍の松を
梅より花白くむと梅の肉むと決まぬは
句の妙あり梅類は花やまゝの初めあれしと
昔ありし山梅はとてあや梅ありの風象
を好し幸傍の松を花よりとて山を
あ梅とてむと梅のあ梅と志れとて
△本古のむと梅より花より梅より梅と
又すといふ初とて梅はあ梅のあ乃伴とて

百の橋工奉侍の事定まらざりしれ一方
卯字に橋の字ありて其字を以て
花白よりあるは現在に

お ちれて橋の木徳の事

花と橋の字ありて其字を以て
あるはすうりて其のむちりれと云ふ
橋の字を以て其のむちりれと云ふ
ちれて橋とちれて其のむちりれと云ふ

お ちりて其のむちりれと云ふ
相縁の字を以て其のむちりれと云ふ

お ちりて其のむちりれと云ふ
花の字を以て其のむちりれと云ふ
ちりて其のむちりれと云ふ

お ちりて其のむちりれと云ふ

山の橋の事 席の尾 園友

丁木

山川を以て其のむちりれと云ふ

振

むちりれと云ふ

翁

橋の字を以て其のむちりれと云ふ

あ

田舎の事 橋の字を以て其のむちりれと云ふ

衣

肩衣の事 橋の字を以て其のむちりれと云ふ

三

紙の事 橋の字を以て其のむちりれと云ふ

り

橋の字を以て其のむちりれと云ふ

三

花の事 橋の字を以て其のむちりれと云ふ

橋山

山伏の山とつるや山橋 許云

三平

橋さくや都の牛の白さく 西平

不

橋とあちあち市の麻川 竹翁

大和のくつろとそと子むき

浪工花入の厂の中より 信事

一は橋

やこく一依 松平直忠

吉捨

舟の舟あれ 竹信丁吉

老栗

野の青園一の松乃風

花

花とつぬ傍を定まら草彦

水

竹と山さき今をきく

六行

笹作のそこらと橋と渡りて

加川

橋とさあつてやの草川

雪丸

他社を尋ぐて花の岩より入

草川

み木とえまき 梅のひこせ

水

草むくく陸まそる夕生草

六行

乃心の登る花の茶む付

加川

又案の中もよまきと案

水

供人の門よりきやく月お

六行

お茶おくく笛のつゆ

加川

竹よりりの所く明草

水

梨合ももるきむえりて

六行

人かたよある如きの山吹

加川

肩衣いれれ中の花乃去

許云

西平

竹翁

信事

去徳

似去

草

草彦

信事

石号

凡相

和文

老白

藍水

佛松

一楓

素川

信酒

杯舟

カイ印

書

△木草二去

古八三

◎

冬 朝 一橋 種 藤 越 梅 化安

月いほくれ牡丹盗人 杜玉
 初花の世もよありのいほく
 歌よ名采とらむむ松の声 千り
 傍れ一高の榎乃ちる彦一 文り
 早治の松乃 十抱 法風
 梅ちりてむさくまの賦さき一 一目
 松の山風を中あしよ文 冠那
 木犀の白いさあす村あて 佐角
 乃解木も小言き博の吉富 湖十
 神木の松を松の為奈及 り々
 起てさひしき松の白さ 費仙
 此法ももるそお茶も茶附る 度取
 鴻取も云家の像乃押梅が 有琴
 舟いあちよ足あ松張 七馬
 三十三年杉ちる 尾 住幸
 いろは歌松くろ山あろう

冬 梅 越 藤 種 一橋 朝 冬

△草類二去

古八三

◎

冬 蔓 印 化 一次

草原のまを初物人の矢よ後や 水
 草のゆきをむむゆくのたゆ 正平
 高萩の角かちを松乃守 翁
 解うてるまのさけのむむし 水
 きりく草の實ちる草の実 翁
 一人吹一 芍薬の笑 奈直
 其草ある何果おし草草
 入山の茨は彦一うき同 ソラ
 甲い 昔乃 中よ隠て 翁
 思をぬさの款をさつむ 風友
 引ろく草の陰子をさけよ 玄芳
 おお侍よ遠まつりし草草 似去
 草のまゆやまうりをあろう 翁

草の属する田畑の植お梅州てい教菓と梅

苗代青田の秋は属一種為松川ホハ懸處
そそ樹の根付葉の戸ハ居加[?]の属
之又木の属ハハ伐刻ハお新カクハ葉秋
食ハ入[?]を根付の秋ハ生れあれハ字美
拍寸樹の葉梅の木村の秋ハ地名ハ松葉極葉落
君不都ハ入[?]の秋ハの秋ハ使生あれハ修
木葉の生立と云ハ名ハ秋ハ極葉同交
木の集生ハ名ハ秋ハ名ハ秋ハ秋ハ秋
但竹葉極葉松社ハ秋ハ極葉極葉秋
お切ハ極葉ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋
同例ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋
秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋

一海あり二上山や葉の花 小枝
きりの時方をさきく西風 柳角
イ子 熊塚の階子志まの月の出で 十丈
吐ときれて休む草取 千川

ヒナ ばまのりより子き花の陰 三羽

真 陸のちんのアチり苗代 松糸

句 腰ヲ使テメる 禪 汗云

草 草葉差一抜持テ草花 徐子

後志 抱白やるむ板の目ハ潤 合掌

草 小畑まけりき葉山子修む 千風

草 州の戸乃るをほきハ押れ 菊

草 草の裏ハ裏ハ草ハ草ハ草 方風

草 秋のアチり 比之使 鶴 千角

草 死不入草の小忌布をテテ 菊

草 草の月極のまを片もや 嵐

草 防と防の先ハ先ハ先 嵐

草 松山のまハつハの喉反 酒

草 草の草の草をさハ秋 何

草 板残る防色ハ牛ハ極 支考

草 ソモ路の防乃五分迷 六

カキ
文藻

出代も若狭の芳を以て 甚二
をいさひしき木の材 乙文

橘

明きくはつて修く梅の宮 正和
衆のうらむの二子お侍 二

西花

夕月よきそ面白く土境の松 早水
秋候くく飯の芳隠 万水

柴

梅の木の花を賞よ一芝 吐き

白松

門松を賞納ても真め守 朱角

夕

母を恵よくく山古の児 独笑

月や虫花の凌乃水吞て 助豊

松邊

冬きけりや面白く梅を冬 吉吹

山古く馬ちの山古の風信 柳士

衣冠松のふ乃急ぐれて 林房

千粒くむとささく梅を冬 信化

草川

紙衣の袴く梅おりの拍 小枝

次句

は末極す掃部のみを呼入て 万子

秋邊松風の芳をお園は 揚水

るの園はすけを討せける キ角

梅邊よは木の原を産戸 方丸

秋の早を掃部を 株吉

燈燭の夕へは杖のく毛く 更也

るまねり言葉の下 ソフ

影のあり日いつとる 玉三

翔よりも豆敷はあきむん 菊秋

ささくれ山の社乃三月 彦白

林乃中の森く火きく 乙由

花い今星のまは吸掛 支考

秋石白乃 柳吉 春

△月の桂月のむ秋極わ

早きく何そ三五の桂片 素少

さあきくは杖独るすて 独

そろきくは合長くも恒程

林

芳

き

ヤフ

葉

カキ

早月

お花の枝は春は遠く有るを 千梅
葉の名代 葉は仏のくさり 松人
枝はくさりの枝のくさりの陰声 松三

十七

つぎとひやむの枝の葉は遠く 年松
お花の名を おとすり 葉は 葉毎
葉はくさりの向へぬくさりの穴 葉香
くさりの向へぬくさりの穴 雷之
葉の早 冷鳥つくり 葉
川波を葉はくさりの枝の枝 丈氷

△木草字各三云

下

おく原む枝の枝乃木 菊
枝木の葉はくさりのくさりの枝 蝕子

下

枝木の葉はくさりのくさりの枝 竹司
枝をくさりの枝の枝も異れ 蒲右

丸

藤のさく木も木丸の頃 可之
枝はくさりの枝も木の股 如中

次白コ

藤もくさりの藤も山の木丸も 揚水

尺幅

木丸のくさりの枝のくさりの枝 才丸
青くと川の向乃くさりの枝 月丸

竹

袖袖はくさりの枝の枝も 子去
竹はくさりの枝もくさりの枝 菊

花

二そん草丸も草丸は枝も 去来
草丸はくさりの枝もくさりの枝 丸花

柳

柳はくさりの枝もくさりの枝 僧川
柳はくさりの枝もくさりの枝 三僧

初

刀は帯のくさりの枝も 薙雅
草丸はくさりの枝もくさりの枝 手

一

△松竹 雲 吉吉
松はくさりの枝もくさりの枝 位事

末六

松はくさりの枝もくさりの枝 夕市
松はくさりの枝もくさりの枝

他 松竹の根又草上下に出立て 麋附

世持木や世持の松よき朽て 子角

八条も九条も松のちうく 商人

松よき声の 声よ夕月 未因

初花の植よ古竹結どし 一巻

二三本竹切れんか人うり 支考

あつて草のうくく竹 山店

ふしん竹て折て来る大吹竹 嵐竹

そ竹の枝の言よむ老の口さ 苔蘚

昆吾の僧さうく竹 風麦

松竹の去来あり草の植おは何く

△枝葉おま

枯れ草なるもあき楠の枝 阜袋

草屋の窓より取く花の枝 篠笹

揺りうちい赤ん草の葉 子祐

之本のあく木のを吹丁む 子芝

竹枯葉可朽の葉のま 子角

苗のほの白又草の換うらふ 昌美

△苗根菜面去

根松苗朽竹乃あく声 虫子

苗代まゆるもままうく 嵐雲

ちのむ上根根をうらふ嵐雲

長門より西の心及根向く 翁

根を分て牡丹を移す石の房 松見

博し根さし一の根ある松 已産

梅の葉まきうこの病のころ汁 翁

仄為ちく寸芥子菜の粒 凡松

是菜菜まめくおまの付 翁

麦と菜梅のむを移し り合

△穂実種面去

あし竹はよ門乃松尾 芝菜

松あし穂よ出て葉のむいし 秋青

穂清も始て日又の梅の葉 老氣

人まれす穂の葉のほのむ 二十

葉

花

今

葉

葉

葉

葉

葉

葉

一橋 種まく人の為。斤系 法風
夕白の極とる比ふはなり

△菖菜 面去

片の寸まきして菖の白丁 白皮
柘の皮をそきて菖 陰 葉

月まの片せうき菜の敷 破笠
菜の戸はく維たきらむ キ角

△柘の皮を去

△一甚二の極わ 百向とも
△隆るはきれもさるべき理也

柳 葉枯まの葉、柘 葉枯まの葉、
イ名内三十一柘 白葉見白一 柘 白名白一

山吹 葉枯まの葉、
カニモ 若菜 葉枯まの葉、
イ名ニカヘテモ

牡丹 葉枯まの葉、
イ名ニカヘテモ 芭蕉 葉枯まの葉、
イ名ニカヘテモ 水仙

葉枯まの葉、
イ名ニカヘテモ

右の教イ名は他キヨクとも同おれは
よ二決して寺又二三字合する名は

△葉枯まの葉ニ極わ去 力無事
極ま一 柳 葉枯まの葉、
イ名ニカヘテモ

古式ハ一甚を二度ハ調の時ニ度ハ極わを二ツ
片せうき菜のそ一皮一甚のそをそる物も

カ仙も一皮を二度はすとておし片せうき
れて古式より判寛く片せうきおし三度あり

ハ片せうき二ともは片せうき故に

ハ片せうきよりさうきハ片
ハ片せうき乃 眞 片せうき 葉

アチリ果て柳ハ月の丸片 千中
ハ片せうきの名ハ松も柘も 其由

ハ片せうきを著も柘も柘のもの 其可
加川

昔

新

浪

土

嘉

后

後

八加乃川のあはれき柳 彼柳
ハ梅も蓋乃後と死 果 似去
ナ梅も苦き自あひりり 口舌

ハ早吹の梅の机のおまこそ 知是
ナ夕甲のあれと後とまき梅 山之

ハ陽星も梅定ぬる山うらも 昔角
ア早も梅のおまこそて又る 去来

ナまこそやおまこそと後まき 似去
アあも梅枝のつらさの梅おま 去来

イ後残る そのあまき 亦七
□美生歌不絶

【鑑】此の只日用の世も一社の人和を彼に

おまこそのおまこそまきと一き年あつとも
又日の時をうやと又はすア

猫かそゆる人そまき ヤハ
あの花のちねこまきあひる 翁

柳

白。柳

み

一橋

化

ひき

柳月の上は色々の際 ハ

大をおまこ持しお小傍 柳王
吸おい後ようえの橋上て 亦同

伏見の丁を二社うきく 由之
是れ又山をの尾乃長短 弄う工

悟でもぬちの後合 尤梅
古も猫の跡と何あり 聖梅

松も鼻とちり梅角の赤代 麩附
化社の空死後後人 一品

△同生歌二去 貞去
年誘く妹の告る時を 翁

我入の唇を唇の所を 昔角
唇の爪腫さくあゝあむ 半珍

誰かおまこまきとあまき 工芳
獨ある子もあまきとあまき 臨取

中者あく聖殿吉えとあまき 正秀

皮

やちのうきりを抄寸桐のそ 凍ト
月の簾ひきさんさとおろて
アの後うり子由一草 口お

△秋生お同件生れよ茂不煙

秋生記 雷鬼の怪お水を扱一魚お「物」の考致
田切おの病名「干支」狩彫おせお喙お「物」
名お忌材のせお名「校」居「り」士「教」く

雷

夕立の先うり雷の声 雲竹
るもありうぬ山際乃乃芳 車腫

さを藤の番矢を袖射有毛 三羽

お衣木のろろ扱る花の山 有り

呆るる有毛門の若人 鼠骨

然し一鬼「物」をつくまの西 牛角

風「り」まて「雷」物か一 何容

神の射持乃矢の根尋る 化形

急「り」ある合息て西乃時系 和琳

物

懐「り」ていきま「つ」む都を 三羽

暮

只今「の」有る 彼「の」味危 美虎

川「後」の枕木や「物」の傳「り」む 似真

と毛く「と」是「の」後「は」動「り」て 力弓

誰「や」く「中」出「守」 念「佛」 茂人

思「入」る「戸」を「明」く「て」夜「ま」を 氷

を「射」中「よ」る「の」爪「打」 示右

ま「の」の「巻」を「疾」星「よ」昇「て」 言水

友「の」め「て」ま「き」西「窓」の「井」 右

杖「乃」鳥「の」人「喰」ま「ゆ」く 鳥

一「所」の「物」分「は」限「り」月「院」て 工山

ま「り」の「事」ま「た」お「を」出「つ」く 車友

る「た」の「隙」乃「二」所「を」束「る」 有架

標「乃」く「の」為「ぬ」指「し」ま「の」第 幸平

髪「乃」ち「う」ち「も」只「あ」る「ま」後 鷹仙

猫「姿」取「り」て「後」生「一」人 山只

栗「皮」の「さ」う「あ」る「ま」夕「月」お 胡仲

狐「仲」乃「の」そ「め」く「あ」入 風草

古格

拾

ヤハ

支

蔓

工

天何

そへ

身

加川 龍よりりるを猫の二ム 杯舟
及の或光の砂玉帯目 羨文

名 早もたを引く月の狐川 里可
く作念をけりも生れあ守

カヤ 木匠又の板屋の外も同赤 比志
三上う後一月の明 反 漢尼

村 粟山子の弓へ一も合息 取敏
る士も同赤布して立 小枝

木跡帯に被るる路の群 十丈
美生赤茂の何の夥りれと墨守

捨 △考字三去 古八面去
めきくといよりきき智の声 理明

化 むのまゝゆぬ小考の幾群の 三羽
庭考の白き人よりもり 金幣

誰 ちりくと短小考のおとされて
大束の名も隠しも金衣考 方丸

浪 水考の何の板柱立止り キ角
人の考より考乃 嚙り 八字

名 風乃あふ日も尾長考とよ 一南
又胸考の考りる 石 田入

△虫考字三去
又おいらりり株に考 宰陀

十 色も五色より考るむ一十 梅光
乱る 影りむも考やむ 仲志

△考字三去
月は尺寸考するの株考 撒士

皮 考ふ人より考る考の市 立 社美
考うもあれて考置とらふ 里由

勺 後尖はた今と通る十枝考 采之
考字の明とおおりの五字 勝 地敏

橋 考を考り考る考のりる士 右範
山高考を考およる士の欣構 字路

初 家滴るる考の子供あさう 新古

三

△三 面去
ありくこのよふ君情一 竹菴
うくくくくくを握を又てわり

二

△二 面去
かきつるの圃は犬とこく 孟を
風次方三生ありまのちくくと 菊什

皮

△皮 面去
荒を田鞠うや月の弱 木角
足取り皮空れとあまこく 口お

化

△化 面去
るのくくくくくくくく 梅敷
葬れよまゆくくくくく 良ふ

△三 英件二去

翁

△翁 面去
吟をさるる年枝の宮 口カ
凍梅を戸塚の宿の侍る觸

我

△我 面去
きりる出くくくくく 止糸
初年このれ人の孤月くくく 木角

替

△替 面去
お花をの翁をお守藤の陰 太舟
手短ひくくくくくく 以加

△干支 面去

ヤ

△ヤ 面去
種付くく 丑寅乃角 我玉
良障の羞もきれんを扱る 示右

同字あれども時刻と方角の違あり

△大牛 面去

花持

△花持 面去
うきりもくくくくく 呂丸
妻とすくくくくく 翁

コ

△コ 面去
牛ともを繋てさぐのむき 石介
生牛子乃ちんるせと 口 茂只

△相尾 面去

△相尾 面去
同字相字面をうて三を相字相以外は

孫卷

△孫卷 面去
てる月や別くくくく 老龍
百の後まきくくく 備十

揚

△揚 面去
さひさを神もお好の野の声 之通
向の野乃ちちくくく 斗牛

△降 面去

捨

△捨 面去
牡丹をくくくくく 三羽
ア作捨の夾き月の夕風 叩瑞

化蒙ア下よちりよ阿房友達 翁

ハバト一陽。お第の丁 宇
アお衣を笑ふ和丁の声 佐幸

一書
ハ天作丁傍合あて陽り 翁

已上八百白ノ例已下ハカ仙ノ例
丁トイ名心の手来ておる 理明

砂川
抱込て松山彦きお陽り 支考

ちくくさのほ初りり 明

おの月表したを共いふ 楓竹

二百と二月あのはきあれと作吳ある座り

き却
ナ川 旗をさる。年矣の献立 莫在

ハ志ましくと小あ西かきる小云川
同作あれも献立よまの蓋あてて許さる

海印録に終

